

## 看護学科1年生前期における学生の健康と生活の視点からの フィジカルアセスメント

－腹部の聴診と健康度自己評価の関係－

永田華千代<sup>1)</sup>・二重作清子<sup>1)</sup>・木部泉<sup>1)</sup>・古庄夏香<sup>1)</sup>・能登裕子<sup>1)</sup>・山中真<sup>1)</sup>  
小野淳二<sup>1)</sup>・緒方文子<sup>1)</sup>・新藤孝雄<sup>2)</sup>

純真学園大学<sup>1)</sup> 福岡県立福岡高等学校<sup>2)</sup>

The life of freshman students in the first semester in the school of Nursing university:  
the physical assessment of auscultation of the abdomen from a health care point of view and  
its relationship to a healthcare self-evaluation.

Hanachiyo Nagata<sup>1)</sup>, Kiyoko Futaesaku<sup>1)</sup>, Izumi Kibe<sup>1)</sup>, Natsuka Furusho<sup>1)</sup>, Hiroko Noto<sup>1)</sup>  
Makoto Yamanaka<sup>1)</sup>, Junji Ono<sup>1)</sup>, Ayako Ogata<sup>1)</sup>, Takao Shindo<sup>2)</sup>

JUNSHIN GAKUEN University<sup>1)</sup> Fukuoka Senior High School<sup>2)</sup>

### 要旨:

【目的】 学生が腹部腸蠕動音と健康度自己評価<sup>4,5,6)</sup> との関係をどのように健康と生活の視点から認識しているかを明らかにする。

【方法】 J大学看護学科1年次110名を対象に、7日間継続して腹部腸蠕動音と健康度自己評価を記録した。統計的解析はマン・ホイットニのU検定 ( $p < 0.05$ )、ピアソン相関係数の検定を用いた。

【結果】 学生は、日常生活において、自分の体調不良時に腹部腸蠕動音を聴診していた。1週間の健康度自己評価と腹部腸蠕動音との関係においては、9割以上の学生が腹部腸蠕動音は正常であり、学生の健康度自己評価は、月曜日が日曜日と比べて低い傾向であった。

【結論】 学生は、腹部腸蠕動音の聴診を自分の日常生活に用いることで、健康に向かい合う意識が高まり、健康行動に繋がった。

キーワード: フィジカルアセスメント, 腹部の聴診, 健康度自己評価, 生活と健康の視点, 看護学科1年生前期

**Abstract:** The life of freshman students in the first semester in the school of Nursing university and the physical assessment of auscultation of the abdomen from a health care point of view and its relationship to a healthcare self-evaluation.

Objective: To clarify how students perceive the relationship between bowel sounds and the healthcare self-evaluation from a health and life point of view.

Method: The bowel sounds and self-evaluation of 110 freshman students of the J University of nursing were recorded for seven days in a row. The Mann-Whitney U test ( $p < 0.05$ ) and Pearson, s correlation coefficient was employed for statistical analysis.

Result: Students listened to their bowel sounds when they felt sick in their daily lives. With regard to the relationship of their bowel sound and their healthcare self-evaluation for 7 days, it was discovered that more than 90% of the students had a normal bowel sound. Analysis of their healthcare self-evaluation showed that their score was more likely to be lower on Monday than any other days of a week.

Conclusion: Students became more aware of their health and it led them to take healthy actions.

**Keywords:** Physical assessment, Auscultation of abdomen, healthcare self-evaluation, life and healthcare point of view, freshman students in the first semester in school of nursing.

## I. 緒言

基礎看護教育においては、看護実践能力の育成の向上のために、平成21年度の新カリキュラム改正で新たに「フィジカルアセスメント」科目が看護基礎技術として構築された。看護実践能力育成については、看護基礎教育の充実・改善の方向性から、「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(平成23年2月厚生労働省)が卒業時の到達目標として提示された<sup>1)</sup>。

現在、各々の教育機関では、カリキュラムについて、看護実践能力育成につながる看護技術教育の構築やフィジカルアセスメントの教育内容が検討されている。公表されているシラバスをみると、到達目標(SBO)に「看護におけるフィジカルアセスメントの意義を理解し、フィジカルイグザミネーションの基本的技法が実施できる。」また、看護過程においては「患者の情報収集」の到達目標が多くみられる。

平成23年1月20日医学書院から発行されている基礎看護技術Iフィジカルアセスメントの項目には、正確な技術と知識は情報収集のために行うことが記載されている<sup>2)</sup>。私たちは、学生が、正確な技術と知識をもって、フィジカルアセスメントを行う対象者の健康と生活過程へどのように用いていくのかを学ぶことが看護実践能力の育成につなげる視点であると考えている。

平成23年4月に開校した純真学園大学の看護学科カリキュラムは、教養教育科目、専門教育科目から成り立ち、専門教育科目中には専門基礎科目としての人体構造の機能や専門科目としての看護の基礎科目フィジカルアセスメント・看護学概論等が位置づけられている<sup>3)</sup>。基礎看護教育においては、看護の基礎的知識を理解したことを演習・実習へと活かしながら学習が結びついていく過程で看護実践能力が育まれてくる。看護実践能力が高まる看護学実習では、対象者に安全・安楽・自立を考慮した看護が実施できるかどうかの判断が学生に求められてくる。学生が、対象者に看護の技術を行うかどうかの判断は、フィジカルアセスメントが重要な役割を果たしている。フィジカルアセスメントは、対象者を理解するため、看護過程における情報収集の方法やケアの提供・実践の評価を行う技術として有用である<sup>2)</sup>。本学の

フィジカルアセスメントは、1年次前期に開講されており、学んだ技術を学生自身の日常生活に活かすことができることを目標にしている。

1年次前期に開講されたフィジカルアセスメントは、からだがどのような仕組みで、その日常生活行動を行っているのか、その行動は正常なのか、その人にとって変化する生活の中で健康なのか等を、自分自身の身体や学生同士が相互に被験者になって測定手技の実際を経験しながら学習をすすめている。しかし、形態機能学は開講されているが、学習進度との関係から、解剖生理学の知識に説明を要し、講義や演習には創意工夫がある。その1つの方法として、学生は学んだ技術を、自分の日常生活で疑問を持って使い、自分の健康に向き合うことができるように課題を提示している。消化器のフィジカルアセスメント腹部の聴診においては、「音」が何を意味しているのか、自分の「正常性」を健康と生活の視点から理解することが重要である。

## II. 目的

学生は、自分自身の腹部腸蠕動音の正常性を理解するために、1週間腹部腸蠕動音を聴診する。健康と生活の視点から、聴取した腹部腸蠕動音と健康度自己評価<sup>4) 5) 6)</sup>との関係が、どのように認識されているのかを明らかにする。

## III. 用語の定義

1. 健康度自己評価<sup>4) 5) 6)</sup>とは、普段の健康を学生自身がどのように感じているか、自分の健康状態を主観的に評価することである。
2. 学生自身の腹部腸蠕動音の「正常性」の基準は、Physiko(京都科学)腹部腸蠕動音とする。

## IV. 研究方法

1. データ収集期間  
2011年5月19日から2011年5月25日
2. 研究参加者  
J大学看護学科1年次118名
3. データ収集場所  
平日12時から13時の時間帯に基礎看護実習室において、学生は、自分自身の腹部腸蠕動音を仰臥位で聴診した。休日は、個人で食事前に行った。

#### 4. データ収集方法

学生は、腹部腸蠕動音の聴取を朝昼夕食前7日間継続して行い、自由記載した。次に、腹部腸蠕動音と健康度自己評価の曜日毎の関係を調査した。

##### 1) 腹部腸蠕動音と健康度自己評価の調査

- (1) 学生には Physiko (京都科学) 腹部腸蠕動音を参考に「正常性」の基準を決めるように説明した。
- (2) 自己の腹部腸蠕動音を4段階 (1. 正常 2. 亢進 3. 減弱 4. 亜イレウス) とした。
- (3) 身体健康度自己評価票<sup>4) 5) 6)</sup>を4段階 (1. たいへん健康 2. まあ健康 3. あまり健康でない 4. まったく健康でない) とした。

##### 2) 自分の日常生活における腹部腸蠕動音の使用目的の調査

##### 3) 腹部腸蠕動音が「正常」である学生の健康度自己評価の調査

#### 5. データ分析方法

- (1) 学生は、朝昼夕食前に聴取した3回の平均で、その日の腹部腸蠕動音とした。
- (2) 1日1回記載された健康度自己評価をその日の健康度自己評価とした。
- (3) 統計的解析は1週間の腹部腸蠕動音と健康度自己評価との関係において、マン・ホイットニのU検定 ( $p < 0.05$ ) を用いて分析した。正常な腹部腸蠕動音と健康度自己評価においては、ピアソン相関係数の検定 ( $p < 0.05$ ) を用いた。

#### 6. 倫理的配慮

データ収集は、看護学科1年生に参加依頼の文章を配布して、参加の意思があるかどうか、文章で研究の目的や方法の説明を行い、学生の自由意思による参加とした。学生から研究の承諾が得られた場合は、承諾書に署名を得た。私たちは、学生に、この段階でも参加を断ることができ、協力を承諾した後でも参加の中止ができることや、研究目的以外にデータは持ちないこと、個人情報保護を保護したうえで研究結果を公表することを文章で説明した。本研究は、所属する大学の研究倫理審査委員会承認 (純真学園大学生命倫理委員会承認番号: 2) を得て実施した。

## V. 結果

#### 1. 研究参加者の概要

- (1) 研究を依頼したJ大学看護学科1年次118名中、研究協力が得られた110名であった。学生は、日常生活で、腹部腸蠕動音を測定した。
- (2) 朝昼夕食前の腹部腸蠕動音と健康度自己評価関係については、7日間継続観察して記録した学生89名を対象とした。有効回答率は、75%であった。

#### 2. 日常生活における腹部腸蠕動音の使用目的

- (1) 日常生活に使用した110名の学生は、腹部の腸蠕動音を「自分の体調不良時に用いている」学生88名 (73%), 「健康管理・評価」13名 (11%), 「学習・演習」2名 (2%) 「その他」17名 (14%) であった (図1)。
- (2) その他の中には、1日の活動量と食事の関係による便秘時の腹部腸蠕動音の減弱による1日の過ごし方の課題を見出した学生もいた。



図1 日常生活における腹部腸蠕動音の使用

#### 3. 1週間聴診した腹部腸蠕動音の正常性について

- (1) 1週間の「健康度自己評価票」の4段階と腹部腸蠕動音の4段階との関係においては、110名中9割以上 (99名) の学生において腹部腸蠕動音は正常であった (図2)。

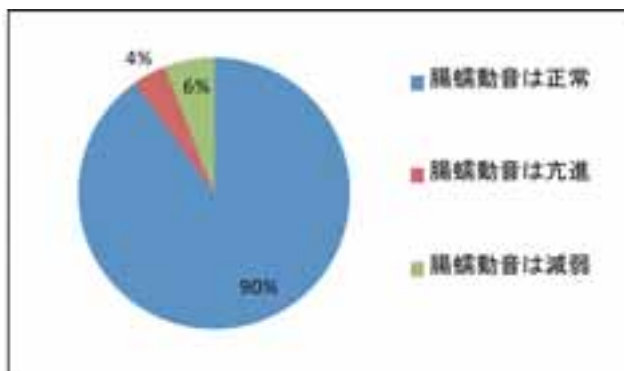


図2 1週間聴診した腹部腸蠕動音の正常性



#### 4. 1週間の腹部腸蠕動音と健康度自己評価の曜日ごとの関係 (表1・図3・図4)

(1) 1週間測定した89名の学生を対象にした。1週間の腹部腸蠕動音の4段階と健康度自己評価の4段階をカテゴリー別に区分した(表1)。腹部腸蠕動音と健康度自己評価との関係する因子を明らかにするためにマン・ホイットニのU検定を行ったが、有意差はみられなかった(図3)。しかし、1週間の4段階健康

表1 1週間聴診した腹部腸蠕動音の正常性

項目	自分の腸蠕動音	身体健康度自己評価
カテゴリー1	正常	たいへん健康である
カテゴリー2	正常	たいへん健康である
カテゴリー3	正常	たいへん健康である
カテゴリー4	正常	たいへん健康である
カテゴリー5	亢進	まあ健康である
カテゴリー6	亢進	まあ健康である
カテゴリー7	亢進	まあ健康である
カテゴリー8	亢進	まあ健康である
カテゴリー9	減弱	あまり健康でない
カテゴリー10	減弱	あまり健康でない
カテゴリー11	減弱	あまり健康でない
カテゴリー12	減弱	あまり健康でない
カテゴリー13	亜イレウス	まったく健康でない
カテゴリー14	亜イレウス	まったく健康でない
カテゴリー15	亜イレウス	まったく健康でない
カテゴリー16	亜イレウス	まったく健康でない

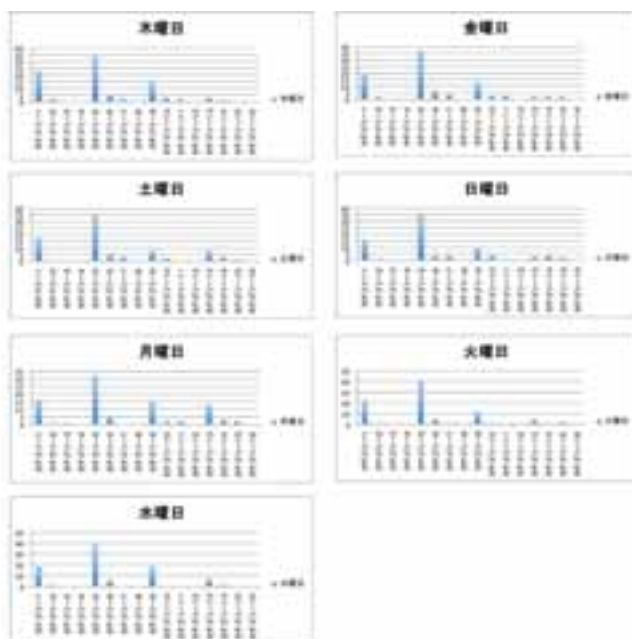


図3 1週間聴診した腹部腸蠕動音の正常性

度自己評価と正常な腹部腸蠕動音との関係においては、月曜日が日曜日と比べて健康度自己評価が低い傾向であった。ピアソン相関係数 ( $r=0.9$ ,  $p < 0.01$ ) (図4)。

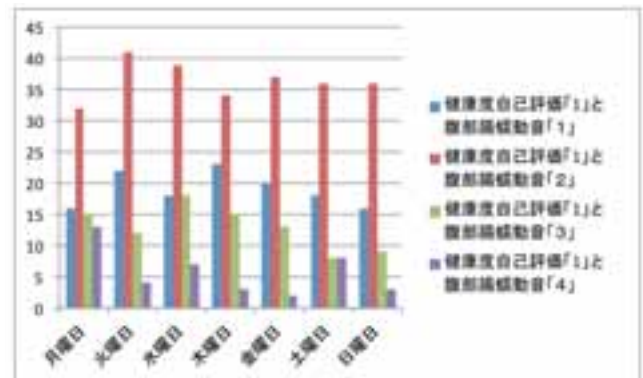


図4 1週間聴診した正常な腹部腸蠕動音と健康度自己評価

## VI. 考察

### 1. 日常生活行動につなげる健康度自己評価と腹部腸蠕動音の聴診の効果

看護学科1年生前期は、一般教養教育学と看護学概論と形態機能学・フィジカルアセスメントが開講されている。フィジカルアセスメントは、1単位30時間で、その授業形態は、講義90分、演習90分(2クラスに分け2展開)で授業を実施している。フィジカルアセスメントを習得する過程においては、形態機能学と看護学概論の既習知識を関連させながら学習を進めている。看護は、生活者である人間の生活や健康を整える役割を担う。看護学科1年生前期5月中旬は、看護学概論で、生活する人間の反応を健康増進の視点からとらえることも学習している<sup>7)</sup>。今回の課題は、学習したことを自ら自分のからだを用いて、主体的に考えて行動できるように、腹部フィジカルアセスメントの講義と演習終了後、課題を提示している。今回、日常生活における腹部腸蠕動音の聴診と健康度自己評価を課題とした。その結果、対象となった学生は、フィジカルアセスメントで学んだ腹部腸蠕動音聴診の技術を日常生活上において自分の体調不良時に使用していた。また、自分の健康から考えて、1日の活動量と食事の関係による1日の過ごし方の課題を見出した学生もいた。このように自分自身の日常生活に用いることで、腹部腸蠕動音の聴診を可能にしている。さらに、腹部腸蠕動音を客観的に聴取できたことで、9割

の学生は、「自分のからだに何がおきているのか」変化に気づくことができ、自分の健康を改めて考える機会となった。

## 2. 1週間の腹部腸蠕動音と健康度自己評価の関係

消化器のフィジカルアセスメント腹部腸蠕動音の聴診において、講義と演習で学んだ技術を使って、1週間聴取した。腹部腸蠕動音と身体健康度自己評価票<sup>4) 5) 6)</sup>の4段階では有意な結果は得られなかった。各曜日の記録から、腹部腸蠕動音は正常だが身体的健康度自己評価は「1. たいへん健康」「2. まあ健康」の2分されていた。学生は、腹部腸蠕動音を聴診することで、自分の健康度と向かい合っていることがわかった。今後も必要に応じた課題を提示しながら、フィジカルアセスメントで得た技術を持って、日常生活における自分の身体的健康度を考える機会を提示していきたい。

## 3. 健康度自己評価と正常な腹部腸蠕動音との関係

健康度自己評価と身体的側面との関係は、これまでの先行研究でも明らかになっている<sup>4) 5) 6)</sup>。本研究においては、9割の学生が腹部腸蠕動音は「正常」であった。腹部腸蠕動音の「正常」と曜日毎の健康度自己評価「1. たいへん健康」「2. まあ健康」「3. あまり健康でない」「4. まったく健康でない」との関係調べた。月曜日が日曜日と比べて、腹部腸蠕動音が「正常」であるにもかかわらず、学生の健康度自己評価が低い。対象の学生は、大学に入学して1ヶ月が過ぎ、新しい環境での生活リズムに適応するための転換期である。この時期の学生の中には、健康状態において、心身の不調や疲労感を訴える学生が増加しているとの報告もみられる<sup>8)</sup>。新しい生活習慣に適応する大学生活の中で、学生にとっては、月曜日は生活行動や健康状態を学生生活リズムに転換する時である。学生は、健康感がすぐれない中でも学習に専念しようとする姿勢がうかがわれる。私たち教員は、このような学生の心身の不安定さをくみ取りながら学習支援をしていきたい。

## VII. 結論

看護の視点としてのフィジカルアセスメント教

育について竹内らは、日常生活を送るうえでの身体の正常・異常を判断し、対象者を生活者として捉えた視点でのアセスメントができる能力を育成する教授法の開発を提案している<sup>9)</sup>。学生は、対象者を生活者として捉えた視点の看護過程のアセスメントにつなげるには、看護学科1年生前期では、「フィジカルアセスメント」を「生活する人間の反応」としてとらえ、「健康と生活の視点」から理解が深められるように工夫をしている。今回、学生は学んだ技術を、自分の日常生活で疑問を持って使えるように、また、自分の健康に向き合うことができるように課題を提示した。フィジカルアセスメントを学んだ学生は、腹部腸蠕動音を自分の体調不良時に用いていた。

(1) 1週間の健康度自己評価票の4段階と腹部腸蠕動音の4段階との関係においては9割以上の学生において腹部腸蠕動音は正常であった。

(2) 1週間の腹部腸蠕動音の4段階と健康度自己評価の4段階関係はみられなかった。

(3) 1週間の健康度自己評価の4段階と正常な腹部腸蠕動音との関係においては、月曜日が日曜日と比べて健康度自己評価が低い傾向であった。

以上のことから学生は、自分の日常生活に用いることで、健康に向かい合う意識が高まり、健康行動に繋がった。

謝辞：本研究にご協力くださいました学生のみなさまに心より感謝申し上げます。本研究は、平成23年度第31回日本看護科学学会学術集会にて「1年前期に開講するフィジカルアセスメントの取り組みと課題（二重作清子他）」、「看護学生1年生のフィジカルアセスメントの聴診による腸蠕動音と健康度自己評価の関係（永田華千代他）」発表した。

## 【参考文献】

- 1) 平成23年2月厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」(2011), 1-26.
- 2) 茂野香おる (2011): 系統看護学講座専門分野 I 基礎看護学 (2) 基礎看護技術 I, 医学書院, 58-177.
- 3) 平成23年度純真学園大学履修要覧別表第1 (第2条関係) 看護学科 (2011), 純真学園大学, 50.
- 4) 西あずさ, 秋月仁美, 榊友希, 坂本奈穂, 出戸亜沙子, 永田真由美, 吉田有希, 渡洋子, 樋口麻衣子, 岡本愛子,

- 末次和恵, 架場香緒里, 九十加奈子, 松波鮎香 (2006): 地域社会における高齢者の生活環境と健康について, 金沢大学学長研究奨励費研究結果論文集, 1:69-77.
- 5) 庄司正美 (2007): 企業従業員の健康度自己評価: 心身症および健康指標との関連, 目黒大学心理学研究, 目黒大学心理研究第3号, 13-24.
- 6) 芳賀博他 (1984): 健康度自己評価と社会・心理・身体的要因. 社会老年学, 20:15-23.
- 7) 藤崎 郁 (2011): 系統看護学講座専門分野 I 基礎看護学 (1) 看護学概論, 医学書院.
- 8) 徳永幹雄, 橋本公雄 (2002): 青少年の生活習慣が健康度評価に及ぼす影響. 24, 39-46.
- 9) 竹内貴子 (日本赤十字豊田看護大学 基礎看護学), 前田節子, 桂川純子, 渡邊弥生, 岩吹美紀, 杉浦美佐子 (2011): 看護過程と連動させたフィジカルアセスメント教授方略の展開 フィジカルアセスメント情報を看護情報として活用する, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 6 (1), 55-64, 引要頁.